

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 24 日現在

機関番号：34605

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24593547

研究課題名(和文) 認知症高齢者グループホームの終末期ケアにおける看護連携システムの有効性の検証

研究課題名(英文) Verification of the effectiveness of the nursing cooperation system for end-of-life care of elderly people with dementia in group homes in Japan

研究代表者

山崎 尚美(平木尚美)(Yamasaki, Naomi)

畿央大学・健康科学部・教授

研究者番号：10425093

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、認知症高齢者グループホームの終末期ケア時の看護連携システムの有効性を検証した。終末期ケアを実施している3地域のグループホームを対象に、看護連携システムの内容妥当性の検討を行った。看護連携システムを愛知県・宮城県・奈良県において実施した。終末期ケアの集会的研修会の実施前後の職員の終末期ケアに対する認識を比較した。認知症高齢者の終末期ケアに関する教育用小冊子を作成し、看護連携システムを再構築した。その結果、集会的研修会の実施はグループホーム職員の終末期ケアに関する知識の向上、終末期ケア時の恐怖・不安の軽減につながっており教育内容および集会的研修会の効果が認められた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to verify the effectiveness of the nursing cooperation system for end-of-life care of elderly patients with dementia in group homes. Nursing homes in three prefectures that have implemented end-of-life care were targeted and the nursing cooperation systems examined. The nursing home staff's awareness of end-of-life care, both before and after, was assessed and the results were compared using the modal Mix Method Approach. Based on the results, an educational pamphlet on end-of-life care for elderly patients was created to facilitate improvements in the nursing cooperation systems, and a workshop on end-of-life care was implemented. As a result, improvements in staff's knowledge of end-of-life care and a reduction in anxiety were both observed, highlighting the effectiveness of the pamphlet and workshops.

研究分野：老年看護学

キーワード：認知症高齢者 グループホーム 終末期ケア 看護連携システム 集会的研修 有効性検証 医療連携

1. 研究開始当初の背景

認知症高齢者グループホームにおいては自立支援のみならず、入所時から終末期を見据えたケア体制の確立が求められている。研究者代表者らは、平成21年から認知症の人が「最期までその人らしく生活する」ために、介護職と看護職のための看護連携システムを開発した。

2. 研究の目的

本研究は、認知症高齢者グループホームの終末期ケアの質の向上をめざし、終末期ケア時の介護と看護の連携を強化するために、認知症高齢者グループホームで働く介護職および看護職との協働のもとに開発した看護連携システムの有効性を検証することを目的とした。

3. 研究の方法

終末期ケアを実施しているモデル地域のグループホームと訪問看護ステーションを対象に、看護連携システムの内容妥当性の検討を行った。看護連携システムを研究分担者の所属する愛知県・宮城県・奈良県において実施した。終末期ケアの集会的研修会の実施前後の職員の終末期ケアに対する認識を比較し、看護連携システムの有効性を検証した。介入時にはアクションリサーチ法に基づいたソフトシステム方法論を取り入れてリフレクシオン内容をデータとするため、定量データと定性データを用いたMix Method法を用いた。検討結果を基盤に、認知症高齢者の終末期ケアに関する教育用小冊子を作成し、看護連携システムを再構築した。

4. 研究成果

研究成果としては、愛知県・宮城県・奈良県で集会的研研修会において教育用小冊子を使用し検証を行った結果、以下の6点が明らかになった。

1) 認知症高齢者グループホームにおける終

末期ケアのケア提供体制と看護活動の実態

認知症高齢者グループホーム(以下,GH)における終末期のケア提供体制と看護活動の実態を把握し、現状に即した教育研修企画の示唆を得ることを目的に、関西・中部・東北地方各1県の管理者への質問紙調査を実施した。基本的属性と「終末期ケアの経験」「ケア提供体制」「看護活動」に関する質問紙を郵送し、3週間の留め置き期間を設け返信を依頼した。分析は記述統計により、各県の傾向を検討した。181件、20.6%(A県42件16.0%,B県71件17.1%,C県68件33.5%)の回答が得られ、ケア提供体制は看護職の配置有41件(33.6%)、療連携加算124件(70.9%)、看取り介護加算65件(41.4%)が算定、看取り有86件(38.2%)、訪問看護利用有64件(40.5%)で、~のいずれも3県に有意な差はなく同様の体制であった。看護活動は「褥創の処置」「点滴の施行」「痰の吸引」が上位を占め、A県が他の2県より高い傾向で、C県は他の2県とは異なり「介護職に身体の変化を伝える」「家族の理解を深めるために医師から説明を補足」が上位を占める傾向であった。

2) 宮城県下のグループホーム職員が認識した終末期のケアマネジメント能力

宮城県下の認知症高齢者グループホームで働く職員が認識しているケアマネジメント能力を把握することを目的に、郵送法による自記式質問紙調査とした。調査対象は、宮城県下のグループホーム職員であり、202か所のグループホーム管理者宛に調査協力の依頼を郵送し、回答可能な職員数を把握した。調査内容は、対象の性別、年齢、グループホームでの経験年数、終末期ケアの経験の有無、ケアマネジメント能力のアセスメントツール(樋口ら;2010)をもとに作成した終末期におけるケアマネジメント能力の測定指標の22項目(4件法)とした。分析は、対象の属

性を一次記述統計で把握した後に、終末期ケアの経験の有無とケアマネジメント能力の項目をクロス分析した。終末期ケアの経験の有無にかかわらず、グリーフケアや今後の予測をするための知識を得ることは、看取り時に職員の自信につながり終末期ケアの質を保障のために必要だと考えられた。

3) 認知症高齢者グループホームの終末期ケアにおける医療連携体制の特徴

宮城県の特徴は、往診専門の医師が中心となり、グループホーム職員および家族に終末期ケアの研修を行い、24時間体制でグループホームでの看取りを実施していた。愛知県の特徴としては、主治医および訪問看護ステーションと契約して連携体制をとっていた。グループホーム内に看護職は雇用せず、訪問看護を利用していた。大阪府の特徴としては、グループホーム内に看護職を雇用しており、終末期においては看護職が中心となり主治医と介護職との連絡調整を担っていた。グループホームの終末期の医療連携体制の特徴には「介護職と医師との連携強化型」「訪問看護を含んだ看護職との連携体制型」「看護師が管理者として調整する医療連携型」があり、それぞれの特徴を活かしたケア提供が必要であることが明らかになった。

4) 認知症高齢者グループホームと連携している看護師の終末期ケアでのジレンマ

グループホームで働く看護師は、看取りを行う際に「もしかしたら救える命ではないか」と自然な死に対して「何も行っていなかった」と後悔していた。また「利用者は畳の上で死にたいと思っている」と理解していたが、それは自己の思い込みに過ぎず、不可能な現実がありグループホームでの看取りを受け入れていると語っていた。高齢者の予後予測することは困難であり「いつ亡くなるかわからない利用者」にとってこれからどう

進むのか認知症高齢者自身にも意思決定しにくい環境のなかで「もっと良くしてあげればよかった」と後悔している現状があった。さらに「最期をどのように看取るのか」最期の意思決定を誰がするのかということについて、介護職員の離職者が多いグループホームでは、介護職員と互いに共通理解をしたいが実際は「意思統一が困難である」ことにジレンマを抱いていたことが明らかになった。病院とは異なった環境において、生活の延長線上の終末期ケアを実施するためには、看護師と介護職員との共通理解を促進することが必要であり、共通言語を理解するためにはグループホームで働く看護職のための研修会や事例検討会の開催の必要性が示唆された。

5) Assessment of Training of Care at the End of Life in Group Homes for Older Adults with Dementia

The average age of the participants was 43.1 years (SD ± 1.20); nurses made up most (53.3%) of the participants. The average years of caring experience in group homes was 5.3 years (SD ± 3.8) and 67.1% were experienced in the care at the end of life. There were 104 responses to the questionnaire (collection rate: 87%) with over 85% choosing; “I understood very well” and “I understood moderately”. The items with a high understanding were “Epidemiology in relation to the death of the elderly”, “Dignifying care at the end of life of the elderly” and “The process to death.” Regarding elderly dementia patients, it may be easier for health workers to deepen their understanding of death and dying through daily care. The items with a low understanding were “Support for decision making to die a

dignified death”, “Confirmation of death” and “Decision making of older adults with dementia.” Japanese culture rarely discusses death and adults with dementia have trouble making decisions, so instances of practical decision making support were rare. Therefore, ensuring communication among family members and confirming the will of the elderly is imperative. Conclusion: Over 90% of participants found the group work useful. The opportunity to discuss opinions on practical methods for sharing of information between families, facilities and medical services helped set the foundation for future .coordination.

6) Effectiveness of WORKSHOP for Group Home Care Providers in End-of-life Care for Elderly People with Dementia in MIYAGI and AICHI , Japan in 2014

The average age of the participants was 43.1 years (SD ±1.20); nurses made up most (53.3%) of the participants. The average years of caring experience in group homes was 5.3 years (SD ±3.8) and 67.1% were experienced in deathwatch. There were 104 responses to the questionnaire (collection rate: 87%).

The quiz was taken by people on the baseline, 78 people right after the workshop and 68 people after time in MIYAGI. 38 people right after the workshop and 36 people after time in AICHI. 104 people took all three quizzes, and their data were the subjects for analysis. The t-test showed significant changes in all 10 questions. The Friedman test also showed a significant change, but the medians showed no change between right after the

workshop. These results indicate that the workshop helped the participants to increase their knowledge in end-of-life care, and their memories were kept for at least three months. In conclusion, the content validity of the workshop was ascertained.

以上から、教育用小冊子を使用した集合的研修会の実施は グループホーム職員の終末期ケアに関する知識の向上 終末期ケア時の恐怖・不安の軽減につながっており教育内容および集合的研修会の実施効果は認められた。しかし、研究代表者の研究機関の異動に伴う物理的制限があったこと、終末期ケアの対象が研究期間内に発生しなかったことから、介入するグループホームの特定に至らなかったこと、またグループホームに出向いた出張講義や事例検討会による介入の有効性の評価には至らなかった。

5 . 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

山崎尚美, 百瀬由美子: 認知症高齢者グループホームの終末期ケアにおける看護活動の実態と課題-質問紙調査の実施-, 愛知県立大学看護学部紀要第 20 巻, pp 6-9, 2015.

山崎尚美, 百瀬由美子: 認知症高齢者グループホームの終末期ケアにおける研修プログラムの実践例と医療連携の特徴, 日本老年精神医学会誌 .27(2)PP203-206 , 2015.

[学会発表] (計 19 件)

平木尚美, 百瀬由美子: グループホーム職員の看取りに対する認識の変化, 第 13 回認知症ケア学会誌, p205, 2012.

神田純, 平木尚美, 小山正則グループホー

ムの看取りにおける医療との連携 -事例検討からの考察- , 第 13 回認知症ケア学会誌 , p204 , 2012.

市政貴恵,平木尚美,伊藤祥グループホームでの看取りを終えて介護職員が学んだこと ,第 13 回認知症ケア学会誌 ,p203 , 2012.

Naomi,H. Yumiko,M.:Effectiveness of Workshop for Group Home Care Providers in End-of-life Care for Older People with Dementia, The 9th International Conference with the Global Network of WHO ,p67,2012.

平木尚美,百瀬由美子:グループホームの終末期ケアにおける看護連携に関する研究 ,日本老年看護学会第 17 回学術集会抄録 , p 231,2012.

平木尚美:グループホームに入居している認知症高齢者の終末期ケアにおける訪問看護師との連携の実態と課題 , 千葉看護学会第 18 回学術集会 , p26 , 2012.

Hiraki.N;Momose.Y: Thoughts of General Practitioners and Their Expectations to Nurses in End-of-life Care at Group Home for Older People with Dementia, 28th international conference Alzheimer's Disease International, p180,2013.

平木尚美 , 小野幸子 , 百瀬由美子 , 天木伸子 , 青木菜穂子 , 蓬田隆子:認知症高齢者グループホームにおける終末期ケアのケア提供体制と看護活動の実態-関西・中部・東北地方各 1 県の管理者への質問紙調査から- , 第 14 回日本認知症ケア学会抄録 , p196 , 2013.

平木尚美 , 小野幸子 , 百瀬由美子 , 天木伸子,青木菜穂子:認知症高齢者グループホームの終末期ケアにおける介護職と看護職の連携に関する課題-関西・中部・東北地方各 1 県の管理者への質問紙調査

の因子分析結果から- ,日本老年看護学会第 18 回学術集会抄録 , p103 , 2013.

平木尚美,小野幸子,百瀬由美子,天木伸子,青木菜穂子,堀口和子:A 県下のグループホーム職員が認識した終末期のケアマネジメント能力 ,第 19 回日本老年看護学会学術集会抄録 , p111 , 2014.

佐藤綾子,蓬田裕樹,蓬田隆子,平木尚美:心から望む最期の姿 -認知症高齢者グループホームが終末ケア時に果たす役割- ,第 15 回日本認知症ケア学会抄録 , 2014.

佐藤和哉,菅秀子,平木尚美:グループホームでの終末期ケアのあり方の一考察 - A 氏がふかふか・はうすで暮らした最期の 45 日間を振り返って - , 第 15 回日本認知症ケア学会抄録 , 2014.

神田純,山崎尚美,小山雅則他:グループホーム事業者による地域交流会の実践報告と課題-動内容の振り返りと今後の課題 , 日本認知症ケア学会関西大会抄録 , 2014.

菊本由里 , 山崎尚美 , 斉田麻衣子 , 内海裕 , 南部登志江:グループホームでの看取りを経験して看護師の立場からの一考察 , 日本認知症ケア学会関西大会抄録 , 2014.

山崎尚美 , 斉田麻衣子 , 内海裕 , 菊本由里 , 南部登志江:グループホームの看取り時の看護職の役割 , 日本認知症ケア学会関西大会抄録 , 2014.

山崎尚美 , 天木伸子,百瀬由美子,南部登志江,菊本由里,小野幸子:認知症高齢者グループホームの終末期ケアにおける医療連携体制の特徴 - 東北・中部・関西地方各 1 県の管理者へのインタビュー結果から - , 第 16 回日本認知症ケア学会抄録 , p262 , 2015.

山崎尚美,天木伸子,百瀬由美子,南部登志江,菊本由里,小野幸子:認知症高齢者グループホームと連携している看護師の終末期ケアでのジレンマ、第 20 回日本老年看護学会学術集会抄録 , 2015 .

Nobuko Amaki, Naomi Yamasaki,

Yumiko Momose, Ayumi

Fujin :Assessment of Training of Care at the End of Life in Group Homes for Older Adults with Dementia , 29th international conference Alzheimer's Disease , 30th international conference Alzheimer's Disease International , 2015.

Naomi Yamasaki, Yumiko

Momose, Nobuko Amaki, Ayumi Fujin,

Sachico Ono :Effectiveness of WORKSHOP for Group Home Care Providers in End-of-life Care for Elderly People with Dementia in MIYAGI and AICHI , Japan in 2014, 30th international conference Alzheimer ' s Disease International, 2015.

〔図書〕(計 2 件)

平木尚美他:認知症高齢者グループホームの終末期ケア(第 1 版), 三恵社, 全 52 ページ, 2014.

山崎尚美他:認知症高齢者グループホームの終末期ケア(第 2 版), 三恵社, 全 52 ページ, 2015 .

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称 :
発明者 :
権利者 :
種類 :
番号 :
出願年月日 :
国内外の別 :

取得状況(計 0 件)

名称 :
発明者 :
権利者 :
種類 :
番号 :
出願年月日 :

取得年月日 :
国内外の別 :

〔その他〕
ホームページ等

6 . 研究組織

(1) 研究代表者

山崎尚美 (YAMASAKI, Naomi)
畿央大学・健康科学部・教授
研究者番号 : 10425093

(2) 研究分担者

百瀬由美子 (MOMOSE, Yumiko)
愛知県立大学・看護学部・教授
研究者番号 : 20262735

(3) 研究分担者

天木伸子 (AMAKI, Nobuko)
愛知県立大学・看護学部・助教
研究者番号 : 40582581

(4) 研究分担者

小野幸子 (ONO, Sachiko)
宮城大学・看護学部・教授
研究者番号 : 70204237

(5) 研究分担者

青木菜穂子 (AOKI, Nahoko)
関西国際大学・保健医療学部・准教授
研究者番号 : 50510997

(6) 研究分担者

堀口和子 (HORIGUCHI, Kazuko)
兵庫医療大学・看護学部・准教授
研究者番号 : 30379953
(平成 25 年度より研究分担者へ変更)

(7) 連携研究者

南部登志江 (NANBU, Toshie)
畿央大学・健康科学部・講師
研究者番号 : 40568391
(平成 26 年度より連携研究者)

(8) 連携研究者

畿央大学・健康科学部・助手
菊本由里 (KICUMOTO, Yuri)
研究者番号 : 90736224
(平成 26 年度より連携研究者)